

## なぜ if I were というのか

英語の仮定法は何か変ですね。出鱈目というか規則性が感じられません。仮定法の現在形は全人称を通して（つまり三人称単数も）動詞原形と同じ形、過去形は、他の動詞では直説法の過去形と同じ形なのに、be 動詞では（単数も）were です。直説法と違うのは I (you, he, we, they) be, he do: I (he) were です。そこで昔に遡って、アルフレッド大王の頃の古英語の主な活用形を拾ってみました。

Old English grammar (Wikipedia)より

現形		<b>heal</b>	<b>steal</b>	<b>be</b>	be	be	<b>can</b>	<b>may</b>	<b>shall</b>	<b>will</b>	<b>must</b>
不定詞		<u>hælan</u>	stelan	sindon	bēon	wesan	cunnan	magan	sculan	willan	mōtan
直説法	I	<u>hæle</u>	<u>stele</u>	eom	<u>bēo</u>	wese	cann	mæg	sceal	wille	mōt
現在	II	<u>hælst</u>	stilst	eart	bist	wesst	canst	meaht	scealt	wilt	mōst
	III	<u>hælp</u>	stið	is	bið	wes(t)	cann	mæg	sceal	wile	mōt
	pl.	<u>hælap</u>	stelap	sind(on), earon	bēoð	wesað	cunnon	magon	sculon	willað	mōton
直説法	I	<u>hælde</u>	stæl	–	–	wæs	<u>cūðe</u>	<u>meahte</u>	<u>sceolde</u>	<u>wolde</u>	mōste
過去	II	<u>hældest</u>	<u>stæle</u>	–	–	<u>wære</u>	cūðest	meahtest	sceoldest	woldest	mōste
	III	<u>hælde</u>	stæl	–	–	wæs	cūðe	meahte	sceolde	wolde	mōste
	pl.	<u>hældon</u>	stælon	–	–	wæron	cūðon	meahton	sceoldon	woldon	
仮定法	sg	<u>hæle</u>	<u>stele</u>	sīe	<u>bēo</u>	wese	cunne	mæge	scyle, scule	wille	mōte
現在	pl	<u>hælen</u>	<u>stelen</u>	sīen	<u>bēon</u>	wesen	cunnen	mægen	sculen	willen	
仮定法	sg	<u>hælde</u>	<u>stæle</u>	–	–	<u>wære</u>	<u>cūðe</u>	<u>meahte</u>	<u>sceolde</u>	<u>wolde</u>	
過去	pl	<u>hælden</u>	<u>stælen</u>	–	–	<u>wæren</u>	<u>cūðen</u>	<u>meahten</u>	<u>sceolden</u>	<u>wolde</u>	

古英語では、一般動詞の仮定法現在では他のタイプの変化をする動詞でもすべて、単数形が直説法現在の一人称単数形と同じ、複数形がそれに-nを加えたものになっています。そしてその語尾を-anに変えると多くの動詞で不定詞が得られます。なお、語尾の母音やnはその後の音韻変化の中で消滅していきます。仮定法過去は、弱変化（規則変化 hælan）動詞では単数形が直説法過去の一人称単数形と同じ、強変化（不規則 stelan）動詞では一人称単数形に-eを加えたもの（つまり二人称単数形と同じ）、複数形がそれに-nを加えたものになっています。

古英語ではbe動詞が三種類ありました。現代英語の現在形はsindon、過去形はwesan、不定詞や分詞はbēonに由来するものです。bēonとwesanの仮定法現在では一般動詞と同じで、sindonは不規則です。そのbēoが現在beとして生き残っています。仮定法過去はwesanのみにあり、強変化動詞と同じく直説法過去の二人称単数形に基づくものになっています。もちろんそのwæreが現在のwereの源です。

現在の助動詞類は古英語では過去現在動詞preterite-present verbsと呼ばれ、他の動詞とは異なる活用をしていました。その仮定法現在は、直説法現在の一人称単数形に似ているものもあれば、複数形に似ているものもあり、まちまちです。仮定法過去の方は、すべて直説法過去の一人称単数形に基づくもので、規則的です。

以上のことから明らかなように、現代英語の仮定法は現在形も過去形もすべて古英語接続法の正当な子孫で、語尾消滅などの音韻変化によって偶々動詞原形などと同じに見える現在の形になったと言えます。ただし、直説法と同じ形では区別がつかないので、wereの他はwouldなどの助動詞仮定法過去形が仮定法で使われることが多くなっています。so that構文中のmayも仮定法現在の意味であると考えられます。

subjunctive modeを英語では仮定法と言っていますが、他の言語では一般的に接続法と呼んでいます。参考までにドイツ語の接続法の活用形を挙げておきましょう。弱変化動詞としてlernen (learn)、強変化動詞としてgeben (give)を示しておきます。ドイツ語の接続法 I 式は英語の仮定法現在、II 式は仮定法過去に相当するものです。I 式は弱変化動詞では直説法現在形と一部の人称で語尾が変わるだけ、強変化動詞では直説法現在二人称・三人称単数形の母音変化が接続法ではなくなります。II 式は弱変化動詞では直説法過去形とすべて同じ、強変化動詞では直説法過去形の語幹がウムラウト化し（一部の動詞ではaがeに変化し）ますが語尾は弱変化動詞と同じです。

Ich bin ein Vogel, also kann ich in den Himmel fliegen. (I am a bird, so I can fly in the sky)

Wenn ich ein Vogel wäre, könnte ich in den Himmel fliegen. (If I were a bird, I could fly in the sky)

	直説現在	接続法 I	直説過去	接続法 II	geben	直説現在	接続法 I	直説過去	接続法 II
Sg. I	lerne	lerne	lernte	lernte	Sg. I	gebe	gebe	gab	gäbe
II	lernst	lernest	lernstest	lernstest	II	gibst	gebest	gabst	gäbest
III	lernt	lerne	lernte	lernte	III	gibt	gebe	gab	gäbe
Pl. I	lernen	lernen	lernten	lernten	Pl. I	geben	geben	gaben	gäben
II	lernt	lernet	lerntet	lerntet	II	gebt	gebet	gabt	gäbet
III	lernen	lernen	lernten	lernten	III	geben	geben	gaben	gäben

スウェーデン語では、接続法現在は-e（不定詞-a、直説法現在-r）、接続法過去は弱変化動詞は=deで直説法と同形、強変化動詞は直説法過去に-eを付加して作りますが、接続法現在はほとんど使用されず、接続法過去も使用が減ってきているそうです。人称変化はなくなっています。デンマーク語では接続法はなく、現実にはありえないことは過去形や過去完了形で表します。オランダ語では、英語のwouldと同様にzullen（未来の助動詞）の過去形zouとzoudeを使います。つまり、ドイツ語以外のゲルマン語では、接続法はなくなっています。

一方、ロマンス諸語では接続法が盛んに使われています。やはり主に直説法の語尾を少し変えて接続法を作っています。フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語には複合時制（完了形）を別にしても接続法現在と過去/半過去があり、語幹の作り方や語尾がそれぞれ違っていますが、現在形での規則動詞-ar型と-er/-ir型の母音交替や、半過去/過去でのフランス語-ss/t、イタリア語-ss/-s、ポルトガル語-ssとスペイン語の-se（他に-ra形もあり）など共通点もあるように見えます。また一部が直説法と同形であったり人称語尾が同じになっているものもあります。この他、条件法（過去未来、ポルトガル語では接続法未来）があって、接続法の一部の機能を担っています。

他の言語の接続法についてもお話しておきましょう。なお、接続法とは別に条件法conditional moodや希求法optative modeのある言葉もあります。条件法は、ある条件の下で現実となる可能性のあることを表します。希求法はMay you have a long life!のような話者の願望を表すための形です。これらの法が複数ある場合は棲み分けをし、それぞれの言語で全体としてほぼ同じ範囲をカバーしていると思われます。印欧祖語では接続法と希求法があったとされ、サンスクリットではどちらも、古典ギリシア語などで希求法が残っています。命令法に欠けた人称や婉曲表現を接続法で表せるので、命令法も接続法に近い言い方です。

スラブ諸語では、be動詞の接続法に由来する言葉を能動完了分詞（いわゆるL分詞）と共に用いることが多いようです。ロシア語ではбыの形で活用しませんが、チェコ語、ポーランド語やセルビア語では人称変化します。

Если бы я был птицей, я мог бы летать по небу. (If I were a bird, I could fly in the sky)

Kdybych byl pták, mohl bych létat na obloze.

ペルシア語では、接続法現在は動詞の直説法現在形の接頭辞mi-をbe-に置き換えるだけです（否定の接頭辞が付く場合や複合動詞の場合はbe-を省略）。接続法過去は過去分詞+be動詞būdanの接続法現在形（bāshamなど）で表します。つまり完了形になっています。

Man parande hastam, pas mītavānam dar āsemān parvāz konam, (I am a bird, so I can fly in the sky)

Agar parande bāsham, pas mītavānam dar āsemān parvāz konam, (If I were a bird, I could fly in the sky)

アラビア語では直説法未完了形の語尾-uを-aに変える（-īna、-ūna、-āniで終わるものは-naや-niを削除する）と接続法が得られます。また、この-aを除去すると、条件文などで使われる要求法短形が得られます。

スワヒリ語では、動詞語幹に前置する時制標識を、仮定法現在では-nge-、仮定法過去では-ngali/ngeli-にします。過去時制の標識が-li-なので、ngeにliを足したことになります。譲歩の時制標識もあります。

Ningejifunza kwa bidii, ningesema Kiswahili. (If I study hard, I will speak Swahili.)

Ningalijifunza kwa bidii, ningalisema Kiswahili. (If I would study hard, I would speak Swahili.)

Nijapojifunza kwa bidii, sisemi Kiswahili. (Even if I study hard, I do not speak Swahili.)

ヒンディー語では、あり得る仮定には不確定未来形を使用し、あり得ない仮定は未完了形（-ta）で表します。

Agar main mehnat se parṭā, to main hindī boltā. (If I would study hard, I would speak hindi)

ハンガリー語では、条件法現在は条件法語尾na/ne、nā/néと人称語尾を付加、条件法過去は動詞過去形+volna (be動詞の条件法現在三単) で表します。

Ha keményen tanultam volna, beszélnék magyarul. (If I would study hard, I would speak hungarian)

フィンランド語では、条件法は動詞語幹に-isiを付加し人称語尾を付けます。条件法過去はbe動詞ollenの条件法+過去分詞で表します。Jos opiskelisin ahkerasti, puhuisin suomea. (If I studied hard, I would speak finnish)

日本語などの膠着語や中国語などの孤立語では、接続法はありませんが、もちろん仮定などを表すための表現はあります。たとえばトルコ語では、動詞語幹に-sa/seを付加すると仮定法になります。-sa/seの後に過去を表す語尾-(y)dı/diを付加すると仮定法過去です。どちらもその後に人称語尾が付きます。

Çok çalışaydım türkçe konuşurdum. (If I studied hard, I would speak turkish)